琉球大学学術リポジトリ

久米島周辺における綿子生産体制と災害

メタデータ	言語:
	出版者: 沖縄科学防災環境学会
	公開日: 2022-07-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 深澤, 秋人
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002019380

久米島周辺における綿子生産体制と災害

深澤　秋人（沖縄大学　准教授）

要旨

近世琉球の首里王府は、王府財政の財源を確保し、薩摩藩への仕上世（＝年貢）上納に対応するため、黒砂糖やウコン、あるいは反布などの特産物を地域ごとに割り振っていた。琉球の特産物は、日本市場で多くが消費されたが、琉球域内では王府によって地域別に割り当てられ、地方役人や王府派遣役人の指導監督のもと管理生産されていた。民衆は王府から年貢（穀物）を賦課されるとともに、特産物の生産を労役として課されていたのである。

沖縄島の西方約100㌔に位置する久米島には紬が割り当てられた。その管理生産体制は 18 世紀前半に成立した。紬の製作やその原料である綿子（＝真綿）の生産のほか、桑の栽培、蚕の飼育、染料（ウコンなど）の確保なども男女の民衆に課された負担であった。綿子には、紬の原料として消費されるものと王府に上納するものとがあった。紬と綿子が上納されると代米が支給され、両先島と同様、貢布制によって年貢米と差し引きされた。

18 世紀中頃にかけて、久米島周辺の渡名喜島、粟国島、伊平屋島、慶良間島にも段階的に綿子の生産が割り当てられ、上納が開始されるが、紬を製作した形跡はない。

ところが、久米島の人口は 18 世紀中頃以降に大幅に減少する。「上江洲家文書」によると、具志川間切の「現人数」（＝総人口）は、1744 年には 3,963 人であったものの、1847 年には 1,255 人まで減っている。なかでも、1740 年代から 50 年代、60 年代から 70 年代、1810 年代から 40 年代が著しい。また、『琉球王国評定所文書』でも、1780 年頃には久米島両間切で 7,000~8,000 人程であった総人口が、1855 年には 2,500 人にまで減少しているとある。具志川間切だけでなく、仲里間切の人口も減っていたことがわかる。

「上江洲家文書」や『琉球王国評定所文書』では、具体的な時期は示されていないものの、これほどまでに人口が減少した要因として、「疫癘」（＝流行病）や飢饉、津波や旱魃などの災害を繰り返しあげている。

さらには、年齢層を意識してみると、15 歳から 50 歳までの男女の「正頭」（＝課税負担者）も含まれていた。紬の製作や綿子の生産を担っていた年齢層も大きな痛手を被ったのである。ここにいたって、久米島では、紬の原料である綿子を自給できない事態となる。

はたして、19 世紀において、1820 年代は粟国島、慶良間島、渡名喜島、30 年代から 40 年代は粟国島、50 年代は伊平屋島、渡名喜島、粟国島で生産された綿子が直接あるいは王府経由で久米島に供給されている。

王府は 18 世紀中頃までに久米島および周辺の島々を紬の製作地や綿子の生産地として編成したが、災害を要因として久米島で綿子が自給できなくなったため、19 世紀前半以降、周辺の島々から組織的に供給する体制を再構築したのである。周辺の島々を久米島への綿子供給地として位置づけ直したといえよう。

そこでは、最も久米島に近い渡名喜島に割り当てが偏重していないこと、粟国島が安定した供給源となっていること、慶良間島に替わって伊平屋島が見いだせることなどを指摘できる。最後に、当該時期のそれぞれの島の状況を災害の有無と関連づけて比較検討する必要性を今後の課題としてあげておきたい。

【参考文献】

・安良城盛昭『新・沖縄史論』（沖縄タイムス社、1980 年）所収、第一部第一論文補註（2）

・豊見山和行「久米島・上江洲家文書中の『首里王府・久米島往復文書控』について」（『琉　球大学教育学部紀要』64、2004 年）、同「村（シマ）社会の諸相」（『沖縄県の歴史 県　史 47』山川出版社、2004 年）

・深澤秋人「近世琉球における綿子の生産―久米島への供給体制を中心に―」（『近世地　域史フォーラム 1 列島史の南と北』吉川弘文館、2006 年）

久米島周辺における綿子生産体制と災害

○深澤　秋人（沖縄大学　准教授）

1，割り振られた特産物

◆久米島と周辺の島々の場合

◇労役による特産物の生産

近世琉球の首里王府は黒砂糖・ウコン・反布などの特産物を地域ごとに割り振る
王府財政の財源確保、薩摩藩への仕上世（＝年貢）上納に対応するため[安良城 1980]
民衆は王府から年貢（穀物）とともに特産物の生産を労役として賦課される
琉球の特産物は地方役人や王府派遣役人の指導監督のもと管理生産されていた

◇紬の製作と綿子の生産

久米島は沖縄島の西方約 100 ㌔に位置、紬（原料は綿子）の製作が割り当てられる
綿子の生産、桑の栽培、蚕の飼育、染料の確保なども男女の民衆に課された負担
18 世紀前半には管理生産体制が成立、間切行政に担当部署、職務規定集に項目化
紬と綿子を上納すると代米が支給され、貢布制によって年貢米と差し引きされる
18 世紀中頃にかけて、久米島周辺の島々にも段階的に綿子の生産が割り当てられる
渡名喜島・粟国島・伊平屋島・慶良間島からも上納、ただし紬を製作した形跡なし

2，久米島への綿子の供給

◆久米島における人口の減少

◇100 年余りのあいだに‥

久米島の人口は 18~19 世紀に大幅に減少[豊見山 2004b]、「上江洲家文書」では‥
1744 年の具志川間切の総人口は 3,963 人、それが 1847 年には 1,255 人、7 割減
1740~50 年代、60~70 年代、1810~40 年代が顕著、『琉球王国評定所文書』でも‥
1780 年頃には久米島両間切で 7,000~8,000 人程、1855 年には 2,500 人まで減少
具志川間切だけでなく仲里間切の人口も減少していた[深澤 2006]

◇要因としての災害

『評定所文書』、「上江洲家文書」[島尻 2002][豊見山 2004a]や関連史料[波照間 2004]
前者は「疫癘」（＝流行病）や飢饉、後者は津波や旱魃などの災害を要因とする
災害が発生した具体的な時期は記されず、史料が作成された時期は 1840~50 年代

表1　具志川間切の総人口の推移

中国年号（西暦）	総人口
乾隆九年（一七四四）	三九六三人
乾隆一〇年（一七四五）	三四五三人
乾隆二〇年（一七五五）	三四七〇人
乾隆二一年（一七五六）	三四八五人
乾隆二四年（一七五九）	三五四六人
乾隆二五年（一七六〇）	三四八五人
乾隆二六年（一七六一）	三四一七人
乾隆四三年（一七七八）	二七一九人
乾隆五三年（一七八八）	二七一九人
乾隆五四年（一七八九）	二七〇五人
乾隆五八年（一七九三）	二四九二人
嘉慶二年（一七九七）	二〇二九人
嘉慶四年（一七九九）	二三八八人
嘉慶五年（一八〇〇）	二三九四人
嘉慶八年（一八〇三）	二五一二人
嘉慶九年（一八〇四）	二四四五人
嘉慶一二年（一八〇七）	二一五一人
嘉慶一六年（一八一一）	一九四九人
嘉慶一七年（一八一二）	一九四九人
道光二七年（一八四七）	一二五五人

◆周辺の島々からの供給と久米島の状況

◇不足する綿子、自給不能

15~50 歳までの男女の「正頭」（＝課税負担者）も減少、綿子の生産の担い手
久米島では紬の原料である綿子が不足、自給できない事態に陥る

◇1820~50 年代における供給体制

1820~50 年代には周辺の島々で生産された綿子が直接または王府経由で供給される
粟国島・慶良間島・渡名喜島→粟国島→伊平屋島・渡名喜島・粟国島[深澤 2006]
渡名喜島は 17 世紀から綿子を上納、久米島に近い島、しかし同島に偏重していない
粟国島が安定した供給源、後半では慶良間島に替わって伊平屋島を見いだせる

◇1850 年代における久米島の状況

1854 年には熱病が流行、死者、翌年には沖縄島などから「寄人」（＝移民）を実施

しかし、同時期、宜野湾間切安仁屋村の男女 16 人が久米島に逃亡[豊見山 2000]

止まらない人口減少、疲弊する地域社会？ 流入者の存在、そして富裕層

3，おわりに

◆久米島と周辺の島々における綿子の生産と災害

◇まとめ

王府は 18 世紀中頃までに久米島と周辺の島々を紬の製作地や綿子の生産地に編成

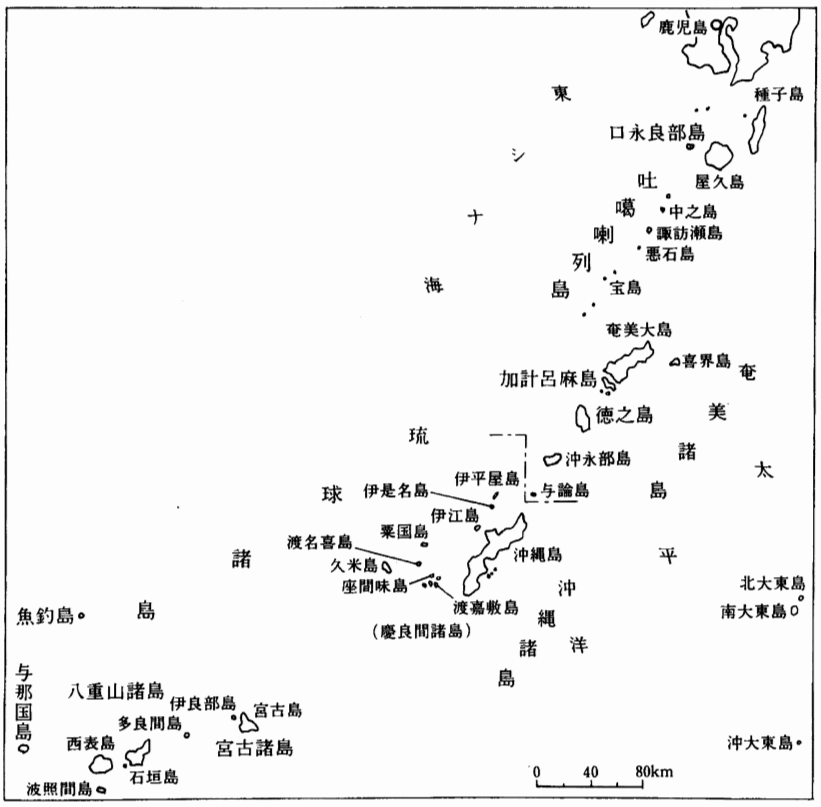
災害を要因とする人口減少（特に「正頭」）により久米島では綿子が自給不能

19 世紀前半以降、周辺の島々から綿子を組織的に供給する体制を再構築

周辺の島々を久米島への綿子供給地として位置づけ直す、変遷・地域差の存在

◇今後の課題

当該時期のそれぞれの島の状況を災害の有無と関連づけて比較検討する必要あり



久米島と周辺島嶼

【参考文献】

・安良城盛昭『新・沖縄史論』（沖縄タイムス社、1980 年）所収、第一部第一論文補註（2）[安良城 1980]

・島尻克美など編『前近代久米島文化の復元 上江洲家・與世永家・吉濱家・宮城家文書 目録』（京都大学人文科学研究所、2002 年）[島尻 2002]

・豊見山和行「近世琉球民衆の「抵抗」の諸相」（『民衆運動史 1 一揆と周縁』青木書店、2000 年）[豊見山 2000]

・豊見山和行「久米島・上江洲家文書中の『首里王府・久米島往復文書控』について」（『琉球大学教育学部紀要』64、2004 年）[豊見山 2004a]

・豊見山和行「村（シマ）社会の諸相」（『沖縄県の歴史 県史 47』山川出版社、2004 年） [豊見山 2004b]

・波照間永吉編『鎌倉芳太郎資料集（ノート篇）第一巻 美術・工芸』（沖縄県立芸術大 学附属研究所、2004 年）[波照間 2004]

・深澤秋人「近世琉球における綿子の生産―久米島への供給体制を中心に―」（『近世地 域史フォーラム 1 列島史の南と北』吉川弘文館、2006 年）[深澤 2006]